



## 平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」の採択

口腔解剖学分野 前田健康

文部科学省では各大学・短期大学・高等専門学校などが実施する教育改革の取組の中から、優れた取組（Good Practice；GP）を選び、支援する大学教育改革推進プログラムを実施しています。このプログラムには教育方法や教育課程（カリキュラムなど）の工夫改善の取組、いわゆる「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」や、社会からのニーズの強い課題に対応した取組など、大学における学生教育の質の向上を目指す特色のある優れた取組、いわゆる「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」があります（[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/index.htm)）。

このたび、新潟大学歯学部が申請した「学生主体の三位一体 新歯学教育課程 一社会に貢献する包括的歯科医師の育成を目指して」（取組責任者：前田健康）が平成18年度特色 GP に採択されました。この特色 GP の採択までには第三者有識者による書面審査とヒアリング審査からなる厳正かつ公平な審査があり、本年度の学士課程における採択率は14.1%、採択件数は全国で31件でした。なお、歯学部が申請した教育課程に関する申請では全国で8件、国立大学で5件という難関でした（[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/gp/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gp/003.htm)）。これまで単科の私立歯科大学で特色 GP に採択されたケースはありますが、国立大学歯学部単独では初の快挙となりました。新潟大学でも工学部が平成16年度に採択されていますが、富山大、長崎大との共同申請で、新潟大学単独では初の採択でした。また、大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻（歯学系）が平成17年度「魅力ある大学院教育イ

ニシアチブ（取組代表者：山田好秋）」にも採択されており、新潟大学歯学部では学部教育、大学院教育で2つの GP を獲得したことになります。

新潟大学歯学部では平成12年度から新カリキュラムに移行し、教員主体の教育、いわゆる講義主体の教育 lecture-format or teacher-centered から学生主体の教育 student-centered への転換を目指し、さまざまな新しい取組を導入してきました。あいかわらず、現在でも「自分の講義はすばらしい」と自画自賛している教員も少なくありませんが（いわゆる教授錯覚）、学生がその講義で得た知識の歩留まりはたった5%にしか過ぎないことは教育学の分野では広く知れ渡っていることです。教員がしゃべったこと、板書したことをひたすら note taking し、一生懸命暗記することが教育ではないのです。教員は教えるのが役目ではなく、学生の学習の補助者なのです。このような観点から、歯学部では教育のあり方を全面的に見直してきました。教育には認知領域（知識）に加え、精神運動領域（技能）と情意領域（態度）がありますが、これらもうまく連携させて教育効果をあげなければなりません。特に歯学教育には医学教育にはない精神運動領域（技能）の教育の占める割合が大きく、ここに歯学教育の大きな特色があります。新カリキュラムではこの3つの領域をカバーする言葉として、申請課題には「三位一体」という言葉を用いました。申請の概要は以下の通りです（<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/gp/>）。

「社会に貢献する包括的医療を実施できる人材育成のために、歯学部では平成12年度から新教育課程を実施している。すなわち、問題発見解決型

学習を教育課程編成の核とし、導入教育として全学的に行っている大学学習法で習得した思考過程と技能を基盤とした歯学専門教育課程を編成している。この課程では、①統合型 PBL 科目に向けてステップアップ式の問題発見解決型学習の展開（認知領域）、②旧来の学科目を廃した総合模型実習（精神運動領域）、③1、2 年次の早期臨床実習（情意領域）等を新規開講し、これら 3 領域の三位一体化を試み、学生の知的好奇心の喚起、教育効率の向上を図っている。これらの学生主体型教育への転換は学生による講義評価アンケートでも高い支持を受けている。本取組のため、学部長及びカリキュラム委員会の強い指導力の下、学部一丸となって、教育ワークショップの開催、全教員の教育研修の機会拡大、基盤整備等を行っている。（申請書から）本取組の特徴としては以下のようなものがあげられます。

1. 1 年次前期（30コマ）に大学学習法（名称：歯学スタディ・スキルズ）を開講し、ここで学ぶ概念、技能を基礎として専門教育課程の編成を行っている。大学学習法では自己学習能力、生涯学習能力、問題発見解決型能力の育成を主眼に、情報検索、レポート作成の原理と技術の育成、プレゼンテーション能力の開発を目指している。特に、必要な情報を取捨選択し、論理展開する能力の育成に重点を置いている。
2. 認知領域、情意領域、精神運動領域に対応した以下の新たな科目を設定している。
  - 1) 認知領域として、少人数による基礎科学演習、臨床歯科学演習の開講（2、3 年次）、岐阜大学医学教育開発センターの主催するインターネットチュートリアル受講（3 年次）、先端研究にふれながら疑問点を抽出し、レポートを作成する歯学研究入門（3 年次）、基礎・臨床歯学を統合した顎顔面診断・治療学（PBL：Problem Based-Learning）の開講（5 年次）を行っている。これらはいずれも学生主体の問題発見解決型学習を目指すものである。
  - 2) 情意領域として、入学当初より病院で患者に接し、モチベーションを高める早期臨床実

習を開講し、従来の単なる見学実習から、患者誘導などの患者接遇実習を行い、プロフェッショナルリズムの育成、コミュニケーション能力の向上を図っている。

- 3) 歯学教育の中で大きな部分を占める精神運動領域（技能教育）として、従来の学問分野の枠を撤廃した講座横断的な総合模型実習を開講している。
3. 国際貢献できる人材育成のために、歯学部専任外国人教員により歯科専門英語（3 年次）、臨床英会話（4 年次）を開講している。さらに、平成17年度から英語履修ために「英語学習の仕方（英語で考えよう）」を大学学習法で開講している。

これに対し、審査委員会からは「この取組は新潟大学歯学部が教育目標とする「社会に貢献する包括的医療を実施できる人材育成」のために新教育課程を実施し、学生主体の問題発見解決型学習能力の育成に向け認知、技能、情意（3 領域）の統合的教育課程を編成し、すでに技能領域で、総合模型実習を考案するなどの実績を上げています。教師中心から学生中心の教育への転換を図り、段階的プログラムの企画、FD 活動にも努力しています。有効性は短期的視点からポートフォリオの活用、学生へのフィードバック、レポート作成などを導入することによって改善をはかり、プロセスを重視した形成的評価法を取り、一方、中長期的視点から新課程による卒業生を対象として地域医療あるいは教育研究現場での活躍状況を追跡して検証する可能性を認識しています。このような地道なアプローチは他大学の参考になり得る優れた事例であるといえます。今後、新潟大学歯学部の独創的な教育プログラムは我が国における社会のニーズ、学生のニーズに合致していることを技能領域にとどまらず 3 領域で実証する課題も残されていますが、これを克服する課程で更なる発展が期待されます。」という講評をいただきました（[http://www.tokushoku-gp.jp/common/pdf/h18theme\\_ba03.pdf](http://www.tokushoku-gp.jp/common/pdf/h18theme_ba03.pdf)）。

本年度全国 4 ヶ所（札幌、横浜、大阪、福岡）で開かれた GP フォーラムでは歯学関係者のみ

ならず、さまざまな分野の方々から数多くの質問、ご助言をいただき、新潟大学歯学部の実践に関する関心が非常に高いものであることを実感しました。

本特色 GP プログラムの採択により、本学部での歯学教育内容のさらなる向上が期待されるとともに、教育環境の整備が進み、学生への教育効果がさらに高まると考えています。なお、本プログラムの補助金により、本年度、歯科教育用コンピュータシミュレーションシステム、デジタル X 線画像観察教育システム、PBL コアステーション

用大型モニター、PBL-チュートリアル用電子黒板などが整備され、また PBL 教育のさらなる改善のために教員の米国派遣が実施され、GP 支援 FD が開催されています。また、2月10日は有壬会館で国際記念シンポジウムが開催されました。カリキュラムは常に社会的ニーズ、学生ニーズに対応していかなければならない生き物であり、歯学部としては特色 GP 採択を足がかりとして、さらなる教育改善に努めていかなければなりません。この教育改善の推進には教員各位の意識改革に加え、学生諸君の意識改革も必要です。

